

# 幼児期の Death Education Program 作成に向けての基本的課題

牧 正 興 ・ 坂 田 和 子

## A Basic Study for Death Education Program in Early Childhood

Seikou Maki ・ Kazuko Sakata

本邦の戦後教育（保育も含めて）のなかでは、とくに生命尊厳等“生きる”ことへの教育がその中心をなしてきたことは、学校教育法体系の中からも大いに予測できる。その反面、“死の教育”はタブー化され、直接教育の場（学校・家庭・社会も含めて）でも回避されてきたことが現実であろう。しかし、今日の頻発する青少年問題（自殺や殺人事件を中心として）を省みるなか、死への認識の低さ・軽視を見逃すわけにはいかない。これらの問題のすべての原因をそれに帰するわけではないが、大きな要因の一つになっていることは否めない事実と考えている。

あるテレビ教育番組で小学6年生33名に対して「人は死んでも再び生き返ることができるか」という質問に対して、27名の子どもたちが「生き返る」と回答していたことは驚異であった。死の概念形成過程に関するこれまでの研究結果では、いくつか属性をもとに概ね5～7歳にかけて理解されることが確かめられている。しかし、この概念形成には「何を」「どのように」経験したのかが問われるもので、単に年齢を重ねることによってなし遂げられるものではないことがこの事実から分かる。しかも死の概念形成はただ待つという自然発生的な過程ではなく、何らかの教育的対応によってはじめて正しい理解へと導かれるものであると考えられる。そこで本研究は、より確実に効果的な死の教育はいつ、どのようになされるべきかについての基盤づくりのための指標を得るために行うものである。

### 問 題

われわれはこれまで幼児の Death Education Program 作成に向け、3歳から6歳の子どもを持つ保護者を対象に調査研究をおこなってきたが、その結果、そのほとんどが生命の大切さと同様、死について子どもに伝える必要性を感じていながら、実際にはその現実を正しく説明できない現状が示された。具体的には非現実的説明に終始していると考えられるものが64.8%、現実的説明によって死を伝えているものが35.2%との結果を得た。さらに非現実的説明は、低年齢化するほどに高率になることも確かめられた<sup>1)</sup>。これらのことについて、小澤ら<sup>2)</sup>は末期

患児とその同胞に関する研究のなかで、患児ときょうだいを含めた家族と一緒に過ごす時間を最大限に確保することは、同胞が患児との死別を受容するための助けになると述べている。さらに、死についての認識が未熟な幼児たちの方が、ありのままを受け入れることができやすく、この経験が彼らの中で「死」についての概念を育てていく材料になっており、少なくとも“タブー”と感じさせないように大人たちが関わっていく必要があることを結論づけている。しかし現実的な場面では「死」＝「タブー」の感覚は根強く、とくに本邦ではその場面に際しては回避してしまうことも稀ではない。

ところで、子どもの「死」に関してのこれまで行われてきた研究は、それらの属性や、認知発達、概念形成の側面で、かつそのほとんどが児童期以降のもので、われわれが目ざす幼児期に関するこれらの研究はほとんどなされていない。その理由もよく理解できる。先に述べたように、「死」の問題、しかも生まれて間もない幼児にそれらの課題はあまりにも違和感があることでもあろう。かつ研究対象として言語的表現能力や認知的表現能力に対する信頼性も疑問が残ることになるであろう。しかしこれまでなされた児童期以降を対象とした多くの先行研究の成果を整理し、そこからそれ以前の関連的要因を予測することは意味深いものと考えられる。「Death Education」教育の可能性としては、むしろその概念形成や認知発達をまってからでは本来的な効果は期待できないであろうと考えるからである。幼児期という未熟な発達の過程にあるからこそ、これらの統合的視点、ないしは実践的視点からのアプローチが必要かつ効果的とも考えられよう。これらのことを踏まえながら、以下、子どもの認知発達や概念形成等の一連の研究成果を概観し、その可能性を探っていく。

### 死の属性

子どもの死の理解についての研究は1930年代に始まり、もっとも代表的なものとしては Nagy (1948)<sup>3)</sup>がブタペストとその周辺に住む3～13歳の子ども378人を対象に行った研究がある。その後さまざまな研究者による報告がされ<sup>4)~8)</sup>、とくに死の属性の視点からは、0～2歳で

は「別れ」または「動かない」と理解し、3～5歳では旅行などの一時的な別離や睡眠と考え、別の世界(天国・星)へ行く、別の存在(天使・幽霊)になって「生き返る」と考えているとされている。また、6～11歳では、死の非可逆性(生き返れない)を理解するが、一方では死を擬人化したり、魂の存在を信じたりもする。概ね9歳にも達すると、死を大人と同じように自然の法則により生起するものと考え、死の普遍性(すべての人がいつかは死ぬこと)に気づくようになる。12～18歳で死の普遍性を理解する。

Speece& Brent (1984) は1934年から50年間に発表された子どもの死の概念の研究35編を普遍性、体の機能の停止、非可逆性の理解の3つの視点から調べ、5～7歳になれば概ね6割の子どものが、これらのことを理解し、10歳前後で大人と同様な理解をするを見出した<sup>9)~11)</sup>。

本邦においては、1983年、東京都立教育研究所が「子供の『生と死』に関する意識の研究」を行っているが<sup>12)</sup>、そもそもこれらの調査は子どもの自殺の原因を探るために行ったもので、死の概念を捉えたものではない。ただここで興味深いことは、生命についての認識が幼稚園から小学校にかけて生物と無生物の正しい認識が急増し、同時に自らの生命も有限であるという認識も急増することが明らかになったことである。

また、仲村 (1994)<sup>13)</sup>は、死に概念形成には時代的・文化的背景に大きく左右されるとともに、Nagy の従来の研究をはじめとするそのほとんどがキリスト教文化圏であることから、本邦とは異なる特異な概念形成を行う可能性もあるとし、Brent がその指標とした三つの視点以外に、死の原因、死後観、死のイメージ、死別体験、死との接触体験等を加えた研究を行った。その結果、死の属性理解ではこれまでの研究結果と矛盾はなかったが、いわゆる「生まれかわり思想」において、年齢増加とともにこの思想が明確に増加していくことを見出した。これらの結果は Koocher (1974)<sup>14)</sup>や Swain (1979) の研究<sup>15)</sup>にも見られるが、その数はわずかなものであった。本邦でのこれらの反応は、仏教思想の影響はあるとしても、それは信仰としての宗教意識ではなく、日常化、民俗化した水準での宗教意識が漠然とした形で影響を及ぼしているものとして結論づけている。

また、仲村 (1994) は、3歳から5歳で11%の子どものが死を考えると死の普遍性についての理解が芽生え始めることが示唆されている。死の非可逆性についても、3～5割の子どものがある程度理解に達することを明らかにしている。これらの研究をもとに藤井 (2002) は、死の概念の発達を図1のようにまとめている<sup>16)</sup>。

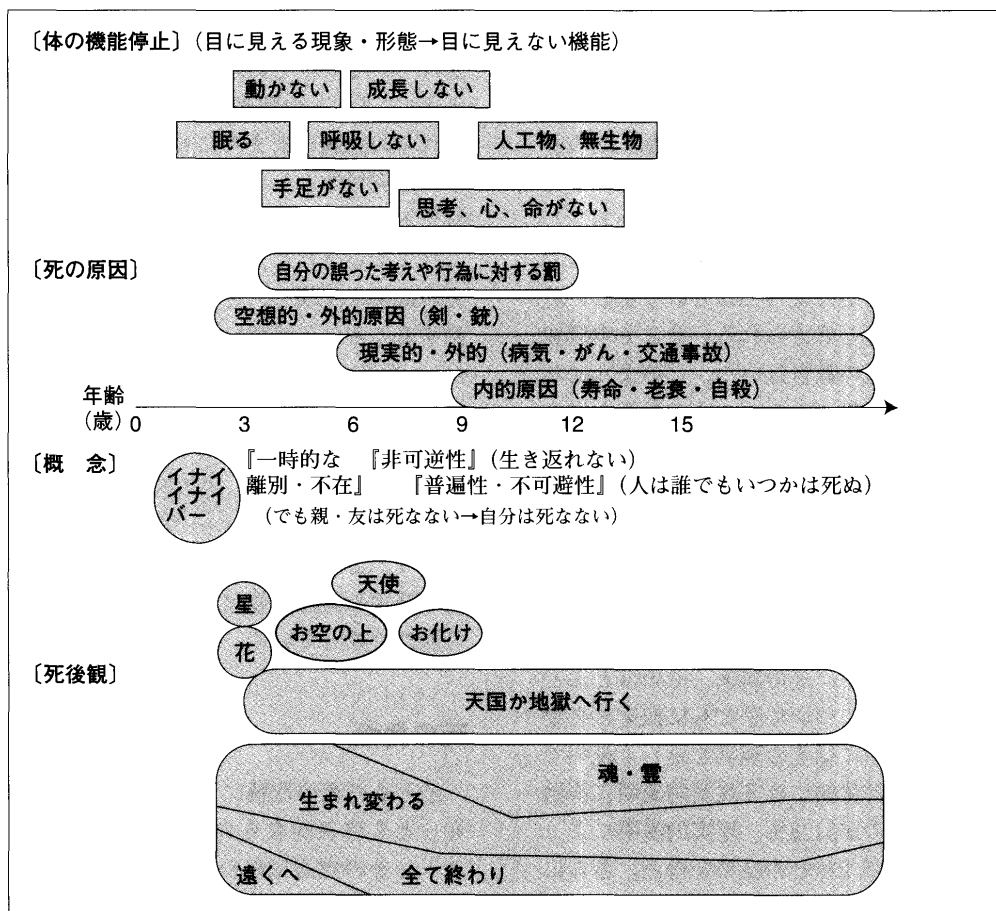


図1 子どもが考える「死の概念」の発達 藤井 (2002)

## 認知発達の視点

Piaget, J. (1986) は子どもの認知的・知的発達過程に焦点をおき、人間発達の中核に認知的側面である知的機能や論理的思考能力の構造化をあげている<sup>17)</sup>。Piaget は出生から2歳ぐらいまでを感覚運動段階、4～7歳ぐらいまでを前操作的段階（直感的思考段階）、7、8歳から11、12歳ごろまでを具体的操作段階、11、12歳以降を形式操作段階と概念化している。感覚運動段階は、生得的な反射行動から対象物の永続性（対象はそれが知覚の場に存在しないときにも、なお存在しつづけている）へと、めざましい発達を遂げる時期である。ここには死に関する特別な概念形成の研究成果は認められないが、対象物の永続性は不変性の認識であることから、これらの概念形成にまったく無縁のものともいえないであろう。

前操作的段階は、事物の分類や関連づけ・判断が直感作用に依存し、そのときどきの知覚的に目立つ特徴に左右され、一貫した論理的操作が見られない。いわゆる不変量の「保存」が成立していない時期である。この時期は、(1) 象徴的思考および前概念的思考の段階（2～4歳ごろ）と、(2) 直感的思考の段階（から4・5～7・8歳ごろ）に区分されている。まず(1)の時期の認知的特徴としては、感覚運動期の終わりごろから感覚運動的シマが内面化され、乳児は「イメージ」を頭の中に描くことができるようになる。同時に、イメージに基づく象徴的行動が開始される。すなわち、あるものが存在しているとき、「意味されるもの（ものそのもの）」と、「意味するもの（たとえば言葉）」とを区別できるようになる。これらの機能の獲得は、現実の場面では、「象徴的遊び＝ごっこ遊び」となってあらわれる。同時に、「意味するもの」としての言語の獲得もさかんになる。

模倣行動も“遅延模倣”として、たとえばテレビで見た怪獣のまねを、スイッチを切った後でもできるといった、眼前に存在していない対象の模倣が可能になる時期でもある。この時期の子どもの「意味するもの」のとらえ方は、独特のものであり、大人のそれと異なるものである。子どもの言葉や意味をささえているものは、子どもがいく個々のイメージを中心とした「前概念」ともいべきものであって、そこでは、大人の概念にみられるような類とそれに属する個との関係の把握は十分ではない。そのため、この前概念に基づく推理も、特殊から特殊へと結びつく、いわゆる転導的推理が行われやすい。たとえば、子どもがみかんが欲しかったが、まだ季節前で青いから駄目だといわれてとりあえずは納得した。ところがお茶を飲むとき、それが黄色いものを見たことで、「お茶は黄色だ。青くない。（だったらみかんも黄色のはずだと推理して）再びみかんちょうだい」と言ったりする。

次に(2)の直感的思考の段階の特徴としては、この時期は概念化が進み、事物を分類したり、関連づけたり

することも進歩してくるが、その際の推理や判断がまだまだ直感作用に依存しているのが特色である。分類や、状況の理解のしかたが、その時その時の目立った特徴によって左右され、一貫した論理的操作はみられない。知覚（もののみえ方）が思考に優先していると考えられる。

具体的操作段階で、子どもは自分が具体的に理解できる範囲のものに関しては、論理的な操作によって思考したり推理したりすることができるようになる。類（クラス）と関係（系列）についての思考の枠組みができ、さらに数についての理解が成立する。この段階の子どもは分類の際にクラスの加法や乗法が可能になる。子どもはもはや、以前の段階のように知覚に惑わされることなく、自己の頭の中で筋道をたて、ものごとを体系立てて考えることが可能になってくる。つまり現実を論理的に再構成することが可能になる。Piaget の言う「保存」の形成である。この保存の形成にとって基本的に重要な操作は、＜可逆的思考（可逆性）＞と呼ばれるものである。可逆性とは同じ行動を二方向（+、-）に、しかもそれが同じ行動であることを意識しながら行うことである。つまり、AからB、あるいはBからAへの変化は外面的な変化であり、量や数においては変わらないことが認識されるようになることであり、「元に戻せば同じになる」という認識である。

青年期の初めころに、＜形式的操作知能＞とよばれる新しい操作が出現してくる。いわゆる形式的操作の段階である。この段階では、思考の対象となるのは現実そのものではなく、「命題」である点の特徴であり、推理することが可能となる。自分自身をも思考の対象とすることができ、自己の性格や能力についての内省的態度は、この形式操作の発達に負うところが大きい。

さらに Piaget は「同化」と「調節」の概念を用いて、認知的・知的発達過程を説明している。同化とは、「ものや外界を自己の行動シマやイメージ、概念を取り入れること」であり、調節とは、「ものや外界に応じて自己の行動シマやイメージ、概念を変えること」である。この同化と調節のバランス状態が適応とよばれるものである。このようなことから、今日の社会状況の中、子どもは外界からどのような死のイメージ、概念を取り込み、また外界に応じて死のイメージ概念を変容させているのであろうかを考える必要がある。

## 死の概念と認知的発達

子どもの死の概念発達に関する研究は、Gesell や Nagy らに代表される年齢との関係で検討された古典的研究と、Koocher に代表される子どもの認知発達との関係によって行われた研究とがある。今日の関連する研究のほとんどは、認知的発達との関係のなかで行われている。

Koocher は6～15歳のアメリカ人75人を対象に、WISC（ウエクスラー児童用知能尺度）を用いて Piaget の認知

表1 認知発達と死の概念発達 岡田 (1998)

質問項目	認知的発達		
	〔前操作段階〕	〔具体的操作段階〕	〔形式操作段階〕
(1)死を引き起こすものはなにか	空想的推理 ● 毒を飲んだとき ● 悪い物を食べたとき	攻撃的行為 ● 毒薬・銃・ナイフ ● 事故	自然のプロセス ● 生命徴候の破壊 ● 老齢・病気
(2)死んだ人を再び生き返らせるにはどうしたらよいか	生死の区別ができない 他者と経験の共有はできない 医者や薬で生き返らせる	死の不可逆性の理解 死の不可避性・普遍性の理解	
(3)人間はいつ死ぬか	—各認知段階での差はない— 7～300歳 (平均86歳)		
(4)死んだときなにが起こるか	—各認知段階での差はない— 埋葬について 52% 死後の世界について 21% 葬式(墓・腐敗)について 19% 擬人化の回答 0%		

表2 死の概念の構成要素と思考の特徴 岡田 (1998)

死の概念の構成要素	思考の特徴	
(1)死の不動性 「死んだ人は○○○をしますか」	〔死の不動性〕の理解以前の子ども 「死んだ人はお腹が空きますか」の問いに:「はい」	生きていることを示す機能に着目: (動く、成長する、食べる、心臓が打つ、考える、話すなど)
(2)死の不可逆性 「死んだ人や動物は生き返ることができますか」	〔死の不可逆性〕の理解以前の子ども 「死から生き返るためにはどうしたらよいか」の問いに: 「病院に連れて行く」	特別な行為が死を蘇らせるという考え: (治療、魔法の言葉など)
(3)死の不可避性・普遍性 「人間は死にますか」 「あなたは死にますか」	〔死の不可避性・普遍性〕の理解以前の子ども 「あなたは死にますか?」の問いに: 「人間は死ぬけれど私は死なない」 「お年寄り死ぬけれど、子どもは死なない」	生活活動の停止に着目:

発達の分類を参考に前操作群 (6～8歳)、具体的操作群 (9～11歳)、形式的操作群 (12～15歳) の3群に分類し、死に関する4つの質問を行った。その質問項目および結果は表1のとおりである。

これらの結果から、死の概念が前操作段階では空想的推理や不可思議な出来事など、自己中心的な理由を含んでいる。また、死を恒久的なものとして考えることができないなど、概念形成の未発達は否めない。しかし、(4)「死んだときなにが起こるか」についてはそれぞれの段階群に差はなく、具体的回答をおこなっていることは意味深い。

また、死の概念発達の構成要素である、<死の不動性 non-functionality>、<死の不可逆性 irreversibility>、<死の不可避性・普遍性 universality>に関する調査を行った結果を、Speece, M. W., Brent, S. B. (1996) ら<sup>19)</sup>は、その思考の特徴を表2のようにまとめている。

以上の結果から、死の不可避性・普遍性の理解以前の子どもは、死は避けることができるもの、あるいは特別な人たち、たとえば自分の家族や小さな子ども、自分自身は死ぬことはない、とらえていることが明らかとなった。

一般的には死に対する態度の関わる因子として、年齢、性差、健康状態、婚姻状態、居住地、教育水準、宗教、

表3 死に対する子どもの反応に関する因子 筒井(1998)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どものまわりにいる両親や大人たちの態度 (表情、声、姿勢)</li> <li>・死んだ人との関係</li> <li>・子どもの心理的発達段階/心身の発達度</li> <li>・喪失時の状況</li> <li>・人の死に会った経験</li> <li>・宗教</li> <li>・その子どもの持っている死のイメージ</li> </ul>
---

職業、趣味活動などが上げられることが多いが、いずれも明確にはされていない。子どもの死に対する反応因子としては表3のようにまとめられることが多いが、これらのことから、年齢、子どものまわりにいる両親や大人たちの態度、喪失時の状況などが影響することがわかる<sup>20)</sup>。

これまで述べてきたように、子どもの死の概念はその認知能力に関連していることがさまざまな視点から述べられている。図1にも示されているが、感覚運動段階と前操作的段階を中心に死の概念についての特徴をみると、3歳以下では死を別離と考えたり、動かないこととしてとらえることが多く、3～5歳は時間経過の中でとらえることが多い。10歳くらいになると、認知能力も大人と同じ程度まで発達し、死の理解も深まる (表4)。

表4 子どもの死のとりえかた 筒井 (1998)

年齢	死のとりえかた
2歳8ヵ月	作った鳩の装飾が床に落ちたのを見て、「鳩さん死んでいる」と言い、また、つるすと「飛んだ、飛んだ」と言う
2歳11ヵ月	雪が川に落ちて消えてしまうのを「雪、死んじゃうんだよ」
3歳以下	死と不在とを区別することができない。死を別離と考える。動きがあるかないかで生と死をとらえる
3～5歳	時間的経過の中で、死をとらえる
4歳	「あのおばあさん、百歳かなあ、もう、死んじゃうよ」
4歳	「おかあさん、年をとらないでね、だって死んじゃうもん」
5歳	飼っていたインコが死んでお墓を作り、「もう、インコの中身は天国だよ」と言う
5歳	「人は死んだら星になるんでしょ」
5～9歳	死を擬人化する
10歳	死を生命の最後の避けがたい結果として理解する

しかし、認知能力が発達しているといっても、経験の少ない子どもたちにとっては、“死”を受容することは難しい。また、自分が死ぬことと、他の人が死ぬことを受け入れることでは違いがあろう。

### 考察とまとめ

以上、子どもの死概念について、その属性の発達、Piaget理論を中心とした認知的発達、概念形成の発達という3つの視点から考えてきたが、Death Educationの可能性としてわれわれが目指す幼児期は、決して否定される時期ではないことが予測された。ここでは幼児期のこれらの問題に焦点をあて考察を深めたい。

まず、死の属性つまり、①誰でもいつかは死ぬという、死の普遍性②死によってそれまでの生体の機能が停止するという機能の停止 nonfunctionality ③死の非可逆性では、3歳にもなれば、「動かない」「眠る」などの理解に達しており、決して無縁な存在ではない。もちろんこれらは確実性のあるものではなく、絵本やお話の中で得た知識や現実生活の中で見た知識が混ざりあってその子ども独自の死の概念を形成している場合が多い。認知的発達においても、前操作段階（直感的思考段階）は、一貫した論理的操作がみられない時期でもある。死を可逆的にとらえたり、死を避けることができるととらえたりもする。さらに特別な人たち、たとえば子どもや家族、自分自身は死なないといった、死の普遍性の理解に不確実性が伴うことも事実である。だからこそ、この時期における Death Education の必要性が問われることにもなる。

子どもが死の概念を発展させ、大人レベルの理解へと至る過程は、Piagetの「同化」と「調節」が不均衡をと

もなう時期であるとも考えられる。知識として「知っている」段階から自分のフィルターを通してその意味が「わかる」過程は、「同化」と「調節」を繰り返しながら、つまり外界から自己のなかに死のイメージ・概念を取り入れるとともに、外界に応じて自己の死のイメージ・概念を変容させていく過程である。幼児期にあっても、大切な人（動物）との死別体験・感情体験は、「死」や「生命」の意味を理解していくうえで大きな要因となる。子どもたちの生活環境からこのような感情体験を取り除くのではなく、これらの体験をどのように実感させていくかが大人に課せられた重要な課題ともいえよう。

このことに関連し、死の臨床的視点から、同胞との死別を経験する子どもについて小澤ら（2002）は、「死についての認識が未熟な幼少時たちのほうが、ありのままを受け入れることができやすく・・・」としたうえで、「年齢が小さいから見せないほうがよい、話さないほうがよいということはない。できるだけ同胞たちが感じのケアに参加できるようにすることが大切である。亡くなった時は、どのようなお別れの仕方をするか（洋服など）を一緒に考えることもよいであろう。・・・中略・・・大人たちが考えている以上に、子供たちは悲しみを乗り越える力を育てることができると感じる。そして、辛い経験ではあるが、それについて話をするのが、悲しみを癒す助けになっていた」と述べており、幼少期から死の現実と向かいあうことの大切さを説いている。

また、重篤な病気を抱える子どもの立場からも、藤井（2002）は3歳になれば自らの死を予期し、感情的に不安になる可能性が高いので、オープンな会話が非常に重要となり、それにより死への不安が軽減できる・・・」としている。子どもへの Death Education の視点からも「患児が入院したときからの“嘘をつかない”を基本としたオープンコミュニケーションが確立して初めて可能になると考えている。発症時の病気説明のときから“病気説明や治療内容”だけでなく、“健康のありがたさ”や“家族の楽しさ、友達といるときの喜び、学校での学ぶ面白さ”さらには“生きる喜び”などを機会あるたびに患児や両親とともに、一緒に考え・感じ、それを表現できるように支援していく姿勢が医療者には必要である」と、子どもであっても、自らの死に直面することの意義について述べている。

これらの臨床的視点は、とくに Death Education の時期的可能性は必ずしも死の概念形成という発達レベルに対応するものではなく、その方法・手法は今後の課題としても、人生早期の幼児期においてこそその可能性は高まることが示唆されている。今日、子どもたちは死を現実生活のなかで体験するだけでなく、テレビやゲーム、マンガ等のマスメディアを通してしばしば強烈な死の印象を一方向的に刺激される機会が増えている。そのことの善し悪しの問題は別として、子どもがそれによって誤っ

た死の概念形成をしたり、強化したりする危険性にさらされているといえる。このような状況下であるからこそ、子どもたちのなかに死についての健全な認識を育てることが大切であろう。子どもが偏った死の理解を示さない正しい人生早期からの実践的教育の実現が望まれよう。

### 引用・参考文献

- 1) 坂田和子、牧正興：Death Education Program 作成の試み（2）九州心理学会第64回大会発表論文集 2004
- 2) 小澤美和、細谷亮太：末期患児とともにその同胞を支えるターミナルケア 12：115-118 2002
- 3) Nagy,M.: The child's theories concerning death. Journal of Genetic Psychology, 73: 3-27, 1948
- 4) Koocher,G.P.: Childhood,death,and cognitive development. Develop. Psychol., 9: 269-375, 1973
- 5) Spinetta,J.J.: The dying child's awarness of death. A review. Psychol. Bull 81: 256-260 1974
- 6) Speece,M.W.,Brent,S.B.: children's understanding of death. A review of three compoents of a death concept. Child Dev. 55: 167-1686, 1984
- 7) Coody D.: High expectations Nurses who work with children who might die. Nurs Clin North Am. 20: 131-142 1985
- 8) ローランド J.H.(今野多助訳)：43章 発達段階と適応 小児と青年モデル (総論)、ホーランド J.C.ローランド J.H.(河野博臣、濃沼信夫、神代尚芳 訳) サイコオコオノロジー 3-がん患者のための総合医療 P478-498メディサイエンス社 1993
- 9) Okolo,E.N.,Mc.Reynolds,J.,:Counseling the terminally ill. Am.J. Nurs 97: 64-69 1997
- 10) Faulkner,K.W.: Talking about death with a dying child. Am.J.Nurs 97: 64-69 1997
- 11) Leikin,S.L.: An ethical issue in pediatric cancer care. :Nondisclosure of fatal prognosis. Pediatr Ann. 10: 37-45 1981
- 12) 東京都立教育研究所相談部児童生徒研究室：子どもの「生と死」に関する意識の研究 東京都立教育研究所1983
- 13) 仲村照子：子どもの死の概念発達心理学研究 5：61-71 1994
- 14) Koocher,G.P.:Talking with children about death. Am. J.Orthopsychiatry 44: 406-410 1974
- 15) Swain,H.L.: Childhood views of death. Death Education. 2 341-358 1975
- 16) 藤井祐治：子どもが考える「死の概念」の発達 ターミナルケア 12：88-92 2002
- 17) 岡本夏木：認識とことばの発達心理学 ミネルヴァ書房 1988
- 18) 岡田洋子：子どもの死の概念 小児看護 21 1445-1452 1998
- 19) Speece,M.W.,Brent,S.B.,:Children's Understanding of Death. A Review of three. 55: 1671-1677 1984
- 20) 筒井真優美：子どもの死をめぐる課題 小児看護 21 1453-1459 1998